◆令和 8 年度 第 2 回（通算第 117 回）蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2026 年 5 月 15 日（金）
Zoom による遠隔講義

好きを究めて知を生み出す

東京科学大学発「知識製造業」を生み出すサイエンス･ブリッジ･コミュニケーターの挑戦

藤田 大悟（だいご）（2005 生命科学科，2007 分子生命科学専攻 MS）
株式会社リバネス 製造開発事業部／株式会社スペースノーム研究所 代表取締役

藤田さんは，好きなことは何でも とことんやりぬく少年だった。学生時代は，小中高生を対象にした実験教室にのめりこんだ。好き放題は学生時代の特権で，卒業したら いわゆるサラリーマン生活が待っているのだろうと思っていた時に，無謀にも「“好き”を仕事にしよう！」という人たちが現れ，藤田さんも仲間になった。巣立ちを意味する“Leave a Nest”に因んで有限会社「リバネス」を創設し，活動を開始した。約 90 名（2025 年現在）の社員のほとんどが MS か Dr という特徴を生かして，研究者視点を大事にする運営の中から，(1) イノベーションを呼び込む「QPMI サイクルという魔法」や（2）自分の好きを起点に，自分の知識と異分野の知識をブリッジし掛け合わせて新たな知識を生み出し，それを社会課題の解決につなげる「Science Bridge Communication」手法などリバネス独自の手法を編み出し，これら一連の仕事を新規の業態と位置づけて，『知識製造業』と呼ぶに至っている。

演劇･演出／舞台監督も好きだという藤田さんのことなので，今回は趣向を変えて，舞台を教室から劇場に移した記録にしてみたいと思い，Gemini に相談したら，次のような案が送られてきた。私（広瀬）は藤田さんのスライドを文字起こしし（音声の文字起こしは時間がかかるので省略），関連情報を 主としてリバネス社の Web ページから集め，有料版 Gemini に提供しただけだ。最終的には，図の作成と 20%程の加筆をした。今回は，学生の皆さんに 優れた『AI 使い』になって欲しいとの願いを込めて，Gemini との共著でお送りする。

------Gemini による要旨------

私（藤田）は今日，退屈な「就職活動の必勝法」や「企業が求める人材像」といった，予定調和な台本を読みに来たわけではありません。◆なぜなら，私自身が科学を愛する「研究者」であると同時に，学生時代からずっと，演劇の演出や舞台監督として「舞台を創り，観客の心を動かすこと」に命を懸けてきた人間だからです。◆演劇の魅力とは何でしょうか？ それは，何もない空間に，演出家と役者，スタッフが一体となって「まだ見ぬ世界」を創り出し，観客を巻き込んで，そこに強烈な感動という「現実」を生み出すことです。◆実は，皆さんがこれから歩む「キャリア」も，そして日夜向き合っている「科学研究」も，まったく同じ構造を持っています。既存の企業の枠組みという「既製の台本」をただ演じるだけの役者（作業員）になってはいけない。皆さん自身が人生の演出家となり，社会という大きな劇場に，誰も見たことのないプロジェクトという「舞台を仕掛ける」存在になってほしいのです。

イントロダクション
修士 1 年生の皆さんへ，ひとつの問い

皆さん，こんにちは。株式会社リバネスの藤田大悟です。本日は，東京工業大学から新しく生まれ変わった「東京科学大学」の，それも修士課程 1 年生（M1）向けキャリア科目「蔵前ゼミ」にお呼びいただき，大変光栄に思っています。

今，皆さんは大学院に進学したばかりで，「これから 2 年間，どんな研究をしようか」「自分の専門性を活

かして，将来どんなキャリアを歩めばいいのだろうか」と，期待と不安が入り混じった時期を過ごしているのではないでしょうか。就職活動を意識し始め，「社会に求められる人材にならなければ」と，既存の枠組みに自分を合わせようとしている人もいるかもしれません。

しかし，今日私が皆さんに最も伝えたいメッセージは，極めてシンプルです。

「あなたの“好き”は何ですか？ 既存のビジネスの枠に収まるな。自分の“好き”を究めて，世界にまだない新しい『知』を自ら生み出し，社会に事を仕掛けよう」ということです。

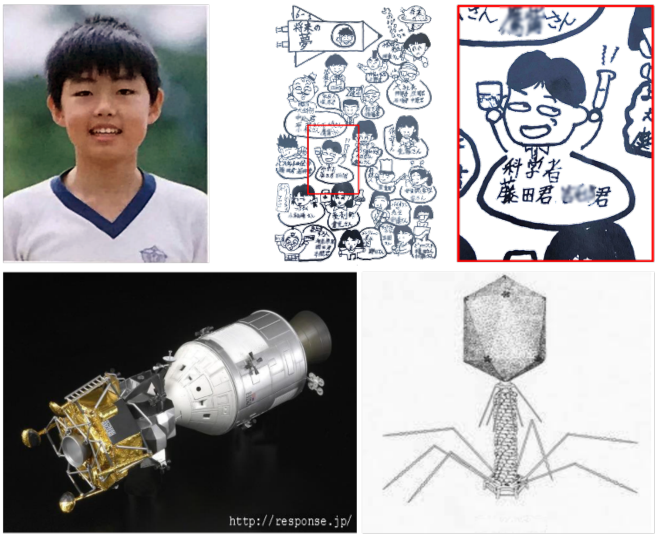
私がなぜそんな風に考えるようになったのか，そして私が所属する「株式会社リバネス」という一風変わった研究者集団が，どのようにして世界を変えるプロジェクトを次々と仕掛けているのか。私の半生と具体的な事例を交えながら，皆さんのこれからの生き方のヒントになるお話をしたいと思います。

第 1 幕

大悟少年の「好き」の芽生えと，人生を決定づけた「学生という特権」

私のキャリアの原点は，すべて少年時代からの「好き」にあります。

1981 年に広島で生まれ，千葉県流山市で育ちました。とにかく小さい頃から科学が大好きで，科学実験や電子工作に没頭する子どもでした [注 1]（図❶A，B）。小学校 2 年生でボーイスカウトに入隊し，最高章である「富士章」を獲得するまで活動を続けました。今も時々ですが顔を出しています。ここで「自然を観察し，仲間と生き抜くための工夫をする」という基礎が叩き込まれたのです。また，高校時代には千葉県立東葛飾高等学校に進みましたが，生徒会活動と理科部無線班（アマチュア無線 2 級取得）でのアンテナ作り（7 MHz 帯でブラジルと交信）に明け暮れる一方で，演劇の演出や舞台監督を経験するという，一見すると科学とは無関係な「表現の世界」にもどっぷりと浸かっていました。高校時代には，自転車で千葉から広島まで日本を横断するという無茶な旅をしたこともあります。とにかく，興味を持ったことには，リスクを恐れずすべて手を出してみる少年でした。なんの役に立つかは全く考えませんでした。



❶小 6 の卒業文集に書いた将来の夢は「科学者」（*A*, *B*）。大学の卒業研究と修論では T4 ファージ（大腸菌に感染するウイルス）の研究に取り組んだ（*D*）。

❷人生行路を決定づけた大学 1 年時の出会い，ScienceTechno（サイテク）部創設，及び日本科学未来館でのサイエンスコミュニケータ活動。後に Science Bridge Communication, NEST 教育へと発展。藤田さんの入学が 2001 年 4 月，サイテクの創部が同年 6 月，科学未来館のオープンが同年 7 月。

そんな私が，皆さんの大先輩にあたる東京工業大学（現・東京科学大学）の 1 年生になった 2001 年，人生最大の出会いが訪れます。

当時の市村禎二郎教授（現･名誉教授）が，講義中にこう呼びかけたのです。

「お台場に新しく『日本科学未来館』という場所ができる。そこを応援するサークルを，学生の手で立ち上

げないか？」

私はこの科目を取っていなかったのですが，友人[注2]から聞いて，この呼びかけに真っ先に手を挙げました。結成されたのが，現在も東京科学大学の公認サークルとして活動している「東工大 ScienceTechno（サイテク）」です（図❷）。科学の楽しさを多くの人と分かち合うことを目的に，実験教室やサイエンスショーを企画･運営する団体です。高校時代の続きで，無線研や演劇部にも所属していました。

このサークル（サイテク）立ち上げの過程で，私は日本科学未来館の初代館長である宇宙飛行士の毛利 衛氏から直接指導を受ける機会を得ました。毛利館長は私たちにこう言いました。

「未来館という場を使って，君たちの好きなことを，好きなようにやってください」

この言葉に背中を押された私は，大学1年生のとき，日本科学未来館に年間 100 日ほど通い詰め，ボランティア活動の立ち上げと科学イベントの企画に没頭しました[注3]。この未来館での濃密な経験を通じて，私はある決定的な事実に気づいたのです。

それは，「学生は特権階級だ」ということです。

学生という身分は，社会的な信用がありながらも，既存の利害関係や企業の論理に縛られず，純粋な「好き」や「情熱」だけで行動できる唯一無二の期間です。私たちは未来館という最高の舞台で，遺伝子組み換え食品，水と光の不思議，食べ物からの DNA 抽出，パスタを使った橋の強度コンテスト，さらには台湾での耐震コンテストへの参加など，ありとあらゆる科学教育の実験を仕掛けました。学内では，学生時代及びその後はリバネスの仕事として生命理工学部主催の「バイオコン」の授業&企画づくりに参画しました。

子どもたちが科学に触れて目を輝かせる瞬間を何度も目の当たりにする中で，私は「科学教育こそが自分の天職だ」と確信するに至りました。伝えることは，学ぶこと。実験教室を企画し，教える側に立つことこそが，自分自身を最も成長させる。そう気づいた私は，大学院に進学した 2003 年，設立されたばかりのあるベンチャー企業の門を叩くことになります。それが「株式会社リバネス」です。

第 2 幕

大学院での研究と，リバネスでの「事を仕掛ける」生き方

大学院での私は，皆さんと全く同じ「一人の研究者（M1）」でした。有坂文雄研究室に所属し，「T4 ファージ」というウイルスのパッケージング タンパク質（gp17）の性状解析を行っていました（図❶D）。

T4 ファージの形を見たことがある人は分かると思いますが，まるで月着陸船か精密なロボットのような，美しく秩序ある構造をしています（図❶C, D）。私はこの姿に魅了され，「ウイルスをナノマシン（ロボット）として使えないか？」という問いを持っていました。T4 ファージは，約 70 個のタンパク質が秩序立って自動的にアセンブリ（構造化）され，内部に DNA を詰め込みます。その DNA を頭部に引き込むタンパク質 “gp17” は，世界最強の引っ張り力を持つ分子モーターと言われています。この形を解明できれば，ナノテクノロジーに革命が起きる。そう信じて研究に挑みましたが，これは超難問であり，修士の 2 年間では思うような成果が出ず，試行錯誤の連続でした。

しかし，私の大学院生活は研究室の中だけで完結していませんでした。昼は大学院でウイルスの研究に没頭し，夜と週末はリバネスのインターン生として働くという，二足の草鞋(わらじ)を履いていたのです。

リバネスは，2002 年に 15 人の理工系の大学生・大学院生によって設立された「研究者集団」のベンチャー企業です。当時の私たちが抱いていた課題意識は 4 つありました。

1. **子どもの理科離れ：** 科学と社会のつながりが見えない子どもが増えている。
2. **ポスドク問題：** 博士号を取得しても，就職先がない若手研究者が溢れている。
3. **研究費の枯渇：** 大学の基礎研究費が減少し，日本の科学技術が衰退しかねない。
4. **アントレプレナーの不足：** 自分の技術で世界を変えようとする起業家が少ない。

この課題を解決するため，リバネスは「サイエンスとテクノロジーをわかりやすく伝える」(研究者と市民のギャップを埋める）というコア コンピタンス（核となる強み）を掲げ，大学院生や若手研究者が自らの専門性を活かして小中高校生に出前実験教室を行うというビジネスモデルを確立しました。私は学生インターンでありながら，B4〜M2 の 3 年間に，100 箇所以上の現場に立ち，そのうち 64 件で中心的な企画運営を担いました。小中高校へ直接足を運び，最先端のバイオテクノロジーの授業を提案し，現場で授業を行いました。

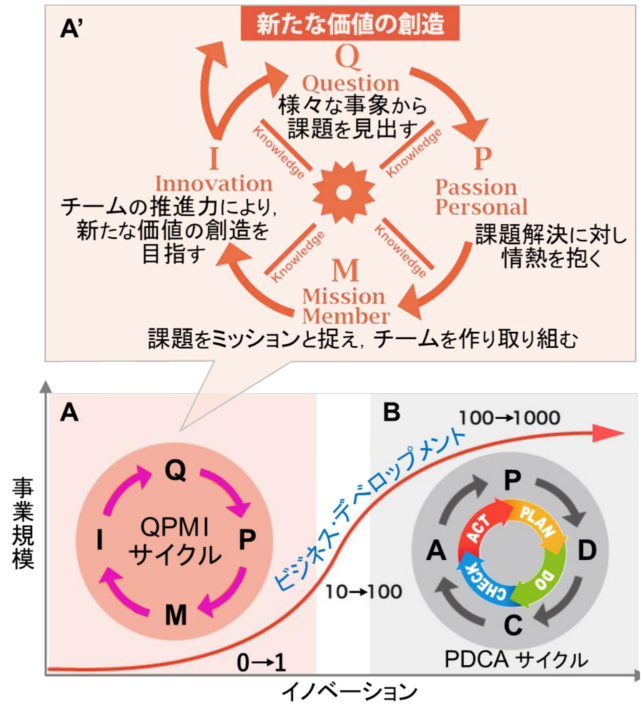
この超過密な大学院時代に，私はこれからの 21 世紀を生きる上で最も重要な仕事のスタンスを学びました。それが，「事に仕える（ことにつかえる)」のではなく，「事を仕掛ける（ことをしかける)」ということです。

20 世紀の仕事は，“すでにある仕組み”の中でいかに効率を上げ，生産性を高めるかという「事に仕える」作業が中心でした。しかし，テクノロジーが極限まで発達した 21 世紀において，単なる作業や効率化は AI やロボットに代替されます。これからの人間に求められるのは，ゼロから新しい価値を創出する“創造性の発揮”，すなわち「事を仕掛ける」生き方です。

では，研究者である私たちが，社会に新しい価値を「仕掛ける」ためにはどうすればいいのか。私たちは，ビジネスでよく使われる「PDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクル」だけではイノベーションは起きないと考えました。なぜなら，PDCA は既存の業務を「改善」するための仕組みであり，既存の延長線上にない「0 から 1」を生み出すことには向いていないからです（図❸B)。

＜“QPMI”という魔法のドアノブ＞ そこで私たちが考えたのは，「研究者ならばどうするか？」でした。最初に知りたいことや解決したい問題があり，そこから研究がスタートします。Question（Q）が始まりなのです。議論を重ねて，リバネスが考案し，実践しているのが「QPMI サイクル」です（図❸A, A')。(注 4)

- Q（Question)： 日常のふとした疑問や，様々な事象から自分だけの「問い（課題)」を見出す。
- P（Passion)： その課題をどうしても解決したいという，強烈な個人的「情熱」を抱く。
- M（Mission)： その熱を周囲に伝え，信頼できる仲間（Member）を巻き込み，共有できる「使命」に変える。
- I（Innovation)： チームの推進力と試行錯誤により，イノベーションの種を生み出し，社会に新しい価値（革新）を創出する。



❸イノベーションに必要な QPMI サイクル（*A, A'*）と従来の PDCA サイクル（*B*）の関係。リバネスが提唱する“QPMI サイクル”は，イノベーションを生み出すための全く新しい概念：質（Quality）の高い問題（Question）に対して，個人（Person）が崇高なまでの情熱(Passion)を傾け，信頼できる仲間たち（Members）と共有できる目的（Mission）に変え，解決する。そして諦めずに試行錯誤を続けていけば、革新（Innovation）や発明（Invention）を起こすことができる。◆この QPMI の考え方を実践できる人こそが 新しい時代のリーダーである。自分の Q と P からスタートすることが重要：どこかで聞いたことのある課題よりは，自分が体感した課題の方がより深く関わることができる。例えば，ニュースで聞いた地球環境の問題よりは，魚が大量に死んで水面に浮いている現場に遭遇した時の問題意識の方が行動に強く反映される。

イノベーションは，どこかの教科書に書いてあるような一般的な課題からではなく，たった一人の強烈な個人の「Q（問い)」と「P（情熱)」から始まります（図❺B)。この QPMI サイクルを回して「0 から 1」を生み出した後に，初めて PDCA を回して「1 を 100」

に拡大していく。皆さんが日々研究室で行っている「問いを立て，実験し，検証する」というプロセスそのものが，実は社会を変えるイノベーションの最小単位（QPMI）なのです。「QPMI＝事を仕掛けること」と言っていいでしょう。“研究者”だからこそ「仕掛けることができた」と思っています。

第３幕：「知識製造業」としてのリバネスの挑戦と，私の仕掛けたプロジェクト

現在，株式会社リバネスは，国内外にグループ約 300 名，社員の 45%が博士号取得者，55%が修士号取得者という，文字通りの専門家集団へと成長しました。私たちが標榜しているのは，教育業でもコンサルティング業でもありません。「地球上で最も効果的な『知識製造業（Knowledge Manufacturing）』を行う企業群になる」ということです。

私たちが定義する「**知識製造業**」とは，「情報」と「知識」を明確に区別し，異なる知識と知識を組み合わせることによって，未解決の社会課題を解決する新たな知識を生み出すことです。

ネットで検索すれば出てくる「**情報**」には価値がありません。「**知識**」とは，研究者が長年現場で実験し，失敗し，考察を繰り返す中で身体化させてきた「暗黙知」です。この暗黙知を社会の実践的なニーズとブリッジ（橋渡し）する人材を，リバネスでは全員の職能として「**サイエンス ブリッジ コミュニケーター®**」（図❹，❺C）と呼んでいます。単にわかりやすく伝える（話す･書く）だけでなく，異なる領域の専門家や企業，町工場を「つなげる･創る」ことによって，ディープテック（既存の技術を組み合わせて新たな市場を生む，複製困難な技術体系）を社会に実装していく職業です。

❹専門家と社会の架け橋（ブリッジ）：科学的な知識（最先端の科学技術や研究内容）を一方的に教えるのではなく，相手の視点や関心に寄り添い，共に新しい価値を生み出すための双方向の対話を通して，社会課題の解決や新たな価値創造（知識製造）へとつなぐための対話手法・スキル。詳細は次の URL（https://lne.st/philosophy/principle/sbc/）を参照されたい。

＜新しいコトを仕掛ける人材は「発掘」から「育成」へ＞

リバネスの創業者があるインタビューで，「僕たちは教育者じゃない。出前授業の目的は，自分たちの会社にいずれ入ってもらいたい子どもを育てることだ」と語ったことがあります。これには極めて長期的な人材戦略が隠されています。子どものうちに先端科学の「熱」に触れた者が，10 年後，20 年後に研究者

❺（*A*）リバネス（Leave a Nest）の誕生前後を明かした座談会記事『蔵前ジャーナル No. 1110, 2025』，（*B*）イノベーションを起こす仕組みの解説本『新時代の世界を変えるビジネスは，たった 1 人の“熱”から生まれる』，（*C*）Science bridge communication の解説書，（*D*）リバネス 20 年間の哲学を凝縮した一冊『知識製造業の新時代』。

となり，リバネスの仲間になる，あるいはリバネスが支援するベンチャーに参画する。研究者のキャリアが 30 年単位で動くものである以上，人材投資もその時間軸で行う。これこそが，私たちリバネスの思想です。それに基づく私たちの企業活動を「**知識製造業**」（❺D）とよんでいますが，具体的には知識と知識の組み合わせによって新たな知識をつくり出すこと。そして新たな知識によって未解決の課題を解決することを目指しています。

実際，リバネスは 2005 年の創業間もない時期に，東京大学発のバイオ ベンチャーだった「株式会社ユーグレナ」と出会い，技術顧問としてその暗黙知やネットワークを提供し，2012 年の東証マザーズ上場（のち東証一部上場）へと至るスピード成長を支援しました。この成功体験が，のちに運用総額 400 億円を超える，リアルテック（ディープテック）を支援するファンドやエコシステムの形成へと結実していったのです。

私自身も，このリバネスという「知識製造業」の舞台で，自分の「好き」を起点に数々のプロジェクトを仕掛けてきました。スライドに挙げた 6 件の活動の中から，象徴的な 3 つの事例を紹介します。

① 宇宙教育プロジェクト（宇宙大豆プロジェクト）

2008 年，民間企業として日本で初めて，国際宇宙ステーション（ISS）の日本実験棟「きぼう」の有償利用スペースを教育目的で活用するプロジェクトを立ち上げました。その代表例が 2010 年の「宇宙大豆プロジェクト」です。日本各地の伝統的な地大豆（じだいず，在来種大豆）をスペースシャトルで宇宙へ送り，ISS に 10 カ月間滞在させた後に地球へ帰還させました。その「宇宙を旅した大豆」を，日本全国の子どもたちと一緒に栽培し，成長の変異を観察・研究したのです。

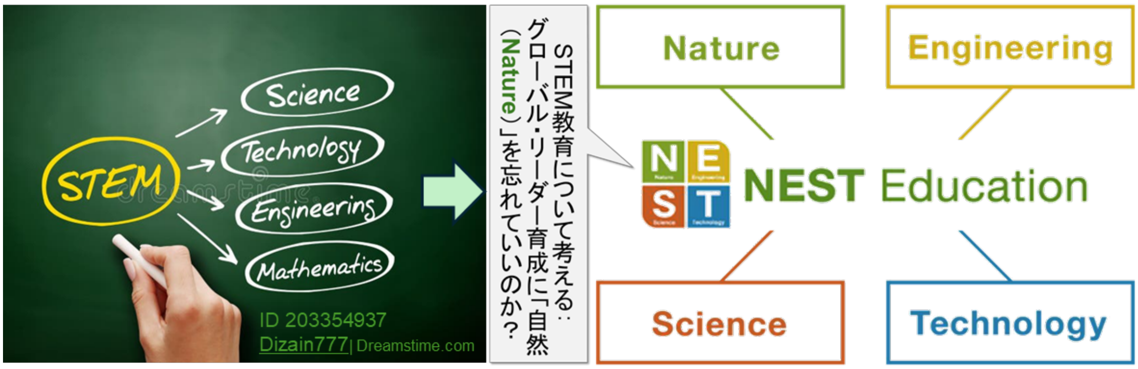
これは単なる一過性のイベントではありません。将来の火星移住を見据えた宇宙農業への問い（植物の宇宙長期保存の影響評価）であり，地域の農業関係者，JAXA，スポンサー企業，学校を巻き込んだ，答えのない「アクティブ ラーニング」の実践でした。このプロジェクトをきっかけに，JAXA との宇宙食研究や，各地域の農業技術ベンチャーの育成へとネットワークが今も広がり続けています。

② プラごみバスターズ大作戦

私の原点であるボーイスカウトとの共創です。街や川，海に落ちているプラスチックゴミを回収し，その動態を調査・撲滅するミッションです。2022 年のボーイスカウト日本連盟創立 100 周年を機に，従来の「スカウトの日」の奉仕活動をアップデートしました。セブン-イレブン・ジャパンのレジ袋収益金を活用し，リバネス，ボーイスカウト，環境ベンチャー，そして町工場が一体となって，現在も自立的に循環する地球貢献プロジェクトとして機能しています。

③ Robotics Lab（ロボティクス ラボ）から「NEST LAB.」へ

2011 年，「世の中にロボット教室は増えたが，ブロックを組み立てて決まったプログラミングをするだけで発展性がない。小学生が本格的なものづくりや研究をできる場がない」という私の問いから，当時筑波大 1 年生だった西田 惇（現・研究者）と共同で「Robotics Lab」を設立しました。小中学生を対象にした本格的な“天才教育”を体系化し，2016 年には JST（科学技



❻広く普及しつつある STEM 教育に欠けている『自然視点』（自然への敬意と理解）を補強したリバネスの教育体系 NEST。

術振興機構）のジュニア ドクター育成塾にも採択されました。

これは現在，オンライン研究スクール「NEST LAB.（才能発掘研究所）」へと統合されています。**NEST** とは，Nature（自然），Engineering（工学），Science（科学），Technology（技術）の頭文字です（図❻右）。私たちは，現代の STEM（Science, Technology, Engineering, Mathematics）教育に「N（Nature：自然）」が入っていないことに強い違和感を覚えています（図❻左）。サイエンスやテクノロジーは人間が作ったものですが，自然は人間の前に厳然として存在します。自然をよく観察し（Naturing），そこから試行錯誤して形にするセンス（Engineering）を磨いた上で，仮説検証の科学（Science）や技術（Technology）へと進むべきです。この自然への敬意と理解（**ネイチャーの視点**）を欠いた急激な技術発展が，地球環境破壊を引き起こしたからです。**真のグローバルリーダー**とは，生態系や地球システムという大きな視点で問いを持てる人です。NEST LAB. では，全国，そして世界の「生きものが好き」「ロボットを作りたい」という子どもたちが，不登校や海外在住といった環境を問わずオンラインで集まり，本物の研究者から指導を受けながら，自分だけの研究テーマを究めています。

結び：10 世代先の地球をデザインする，そして皆さんの「仕掛け」へ

そして現在，2026 年。私の「好き」と「問い」は，さらに次のステージへと進んでいます。

私は現在，リバネスの製造開発事業部に身を置きながら，リバネスの子会社を社名変更する形で設立された「株式会社スペースノーム研究所」（Spacenome Lab.）の代表取締役を務めています。

私たちのミッションは，「10 世代先の地球をデザインする」ことです。

地球上の自然，工学，科学，技術，そして宇宙を統合（nome）し，超長期的な視点で地球環境の持続可能性を高めながら，人類の活動領域を宇宙へと拡張する科学技術基盤を確立することを目指しています。小学生から宇宙に参画できるサプライチェーンを構築するため，2026 年 後半以降に打ち上げ予定の人工衛星「あおば」を活用した宇宙バイオ実験(注 5)・次世代共創プロジェクトを，ユーグレナ社や IDDK 社から資産と知的財産を承継する形で強力に推進しています。

長々とお話ししてきましたが，M1 の皆さんに最後にお伝えしたいことは，スライドの結びにあるこの言葉です。

「学生は特権階級だ。好きを起点に，情熱を持って行動しよう」

大学院という場所は，既存の社会のルールに縛られず，自分の「なぜ？」を最も純粋に，徹底的に究めることができる，人生において**貴重なモラトリアム**（大人として社会に出るための準備期間）であり，かつ最強の武器を持てる場所です。

これからの就職活動やキャリア選択において，「どの会社に入れば安定か」「どの職種が有利か」という，他人が作った「正解の選択肢」を探すのはやめてください。そんなものは 21 世紀の社会では簡単に崩壊します。

そうではなく，あなた自身の頭の中にある強烈な「Question（問い）」と，胸の奥にある「Passion（情熱）」を信じて行動してください。自分が信じて究めた道であれば，あなたが社会に「仕掛けたこと」そのものが，後から振り返ったときに「正解」になります。そしてその営みこそが，結果として地球への貢献，社会の課題解決へとつながっていくのです。

皆さんは，この恵まれた大学院の 2 年間を使って，社会にどんな面白い「事を仕掛け」ますか？

皆さんの胸の中にある「好き」の熱量を，ぜひこの後の Q&A(注 4) で私にぶつけてください。楽しみにしています。

ご清聴ありがとうございました。

【参考】

◆キーワード：

- 東京科学大学発ベンチャー
- 知識製造業

・ScienceTechno
・バイオコンテスト
・サイエンス ブリッジ コミュニケーター

(注 1) 父がエンジニア。

(注 2) その友人の名は鴨居 達明。令和 4（2022）年度第 5 回（通算第 96 回）蔵前ゼミの講師を務めている。

(注 3) 大学 1 年生の 1 年間で，なんと約 100 日も未来館に通い詰めたものですから，後年，私の結婚式の際には毛利館長から直々にビデオメッセージをいただくほどの深い縁となりました。

(注 4) QPMI サイクルに関する Q & A。【1】QP が漠然としか見えていない時はどうしたらよいか？◆ 超異分野学会や森などの普段あまり行かないところに足を運んでみるのも一法だろう。「自分探し」という大げさなものではなく，視点を変えたところに行ってみると自然に湧き出してくるものがあります。そのような 1 次情報が “めっちゃ” 重要だと感じています。【2】QP の段階から MI へとつなげるところは難しそうですが，何かアドバイスは？◆ 出会いの機会を作ることが基本となります。例えば，超異分野学会に出てみる，そこで似たような関心を持っている人に出会えば，パワーアップにつながるでしょう。リアルな人と人の出会いは，“心の距離” を縮め，プロジェクトの加速反応につながります。【3】QPMI サイクルを回して実際にプロジェクトを始める時の条件は？◆ 3 つのキーワードが満たされた場合です : 1) “楽しい”，2) “新しい”，3) “続けられる”。逆にこれらのうちの 1 つでも欠けたら，その事業は止めることになります。【4】チームで取り組むことのメリットは？◆ リバネスでは，少なくとも 3 人でチームを組みます。1 人だけだと，その人がダウンしたらプロジェクトもコケてしまいます。2 人だと，往々にして仲違（なかたが）いして終わってしまいます。3 人いれば，見込みのあるプロジェクトならば，間を取り持ってくれる人が現れ，日の目を見る可能性が高まります。「プロジェクトに命をかけるならば，3 人集めよ！」となるわけです。【5】いくら好きなことと言っても，仕事となると大変なのでは？◆ その通りで，(1) 多少大げさに言えば，大変なことばかりかも知れません。「宇宙教育プロジェクト」を始めたときは，役員の人たちに多額の借金（当時のリバネスには過剰債務!?）をしてもらってのスタートだったことと，私（藤田）自身が「チームで企画し，業務としての形に落とし込んでいくこと」にまだ不慣れだったこともあり，夜も眠れなくなったことがありました。ここを救ってくれたのが仲間の存在と「“好き” と “使命感” をより合わせて縄を縫うような作業」の中でも好奇心が勝（まさ）ったからだと思います。(2)「**仕事＝心が動くこと**」と思っている人が多いスタートアップ企業では，Life-work balance ではなく，Life-work mix を信条にする人が多いようです。

(注 5) ユーグレナ社関連：宇宙での食糧･エネルギー生産に向け，宇宙環境における微細藻類ミドリムシの培養への影響を調べるために，人工衛星内でのミドリムシの成長観察やデータ収集を行います。さらに再突入カプセルによってユーグレナを生きた状態で回収し，DNA の変化を調べます。IDDK 社関連： 医療スタートアップの IDDK が開発した小型顕微鏡技術（MID）を応用した Micro Bio Space LAB を用いて培養と観察の最小化を実現し，人工衛星内で微生物･細胞培養観察を実施し，培養状況のセンシング及び顕微 観察画像を取得します。

東京工業大学（現東京科学大学）名誉教授 広瀬茂久

Grateful to Professor Gemini, our virtual science writer, for working through the 'digital night' to bring this story to light.